

第2節 近江商人に関する一考察

はじめに

昭和53年4月、学科開設10周年を迎えた本学社会学部社会学科では、その記念事業として「社会学研究所」を創立した。その前年に開設された大学院後期博士課程は、地域研究と社会学理論の研究、にその特色をもっているが、それに対応して当研究所でも地域研究に重点をおくこととなった。兼ねて宗門大学の特徴を発揮するため浄土教をはじめ、東西の諸宗教や神社信仰などを現代社会との関連において研究することを意図している。

さて、地域研究としては当面、①「滋賀県中

部広域市町村圏」(3ヶ年計画)、②「変わり行く京都西陣地域」(5ヶ年計画)の社会学的調査研究の、二つのプロジェクトを設定し、53年度から前者の調査研究に着手、後者については現在資料収集の段階にある。

中部広域市町村圏は、八日市市を中核都市とし、その周辺の近江八幡市および安土・能登川・五個荘・日野・永源寺・蒲生・竜王の7町から成立っている。圏内に二つの市をもつ、いわゆる二眼レフ構造をなす広域行政圏である。周知のように、昭和44年度に発足した広域圏行政のねらいは、住民の日常生活圏の広域化という現実を基礎として「都市的地域を中心とし、周

辺農山漁村地域を一体とした広域的かつ総合的な行政を推進」しようとするものである¹⁾。

地方自治の主体はあくまでも市町村自体に存するのであるが、個々の市町村のみでは実現困難なもの、例えばゴミやし尿の処理施設、広域的な消防や医療施設、火葬場・共同墓地の設置、あるいは種々の教育的・文化的・福祉的施設などを広域単位で設置利用し、住民の住みよい生活環境を創出しようとするものである。その意味では、広域行政は各市町村の行政を補完する機能を持つものといえる。かくすることによって圏域内住民の共同性と連帯性が強化され、中核都市と周辺農山漁村、あるいは各自治体相互の有機적連関を緊密化しようとするものである。その際、圏域内の住民が、歴史的伝統をもつ当該地域の社会的文化的遺産を深く自覚することになれば、相互の機能的連帯性も一層強固なものとなるであろう。例えば、圏域内住民の言語や習俗、宗教やエートス等の文化的同質性(Cultural homogeneity)の認識などがそれである。

そのような観点からすると、この圏域内外は湖東地域と呼ばれ、いわゆる近江米の主産地であり、伝統的に真宗信仰の濃厚な地域でもある。また、中世にその起源をもつとされる近江商人発祥の地域でもある。近江商人の最も多く出たのは神崎・犬上・蒲生・愛知の4郡であるといわれ²⁾、その代表的なものは近江八幡市と日野町、それに本論文で取扱う五個荘町で、いずれも本圏域内にふくまれる。歴史的にみると、八幡・日野商人の発祥が古く、五個荘商人はややおくれて発生したといわれる。

近江商人の起源については諸説がある。

- ① 帰化人説をとるもの……三浦周行、中川泉三、菅野和太郎
- ② 地理的環境説をとるもの……喜田貞吉
- ③ 市座説をとるもの……牧野信之助
- ④ 農民生活困窮説をとるもの……平瀬光慶
- ⑤ 武士商人説をとるもの(とくに八幡・日野商人の場合)
- ⑥ 複合説をとるもの……江頭恒治、福尾猛一郎³⁾

おそらく、一説を以てその起源を説明するこ

とは無理であって、前記の複合説のように、多元的な諸要因の複合によって説明することが妥当であると思われる。また、各地の商人によってその取扱った商品の種類やその活躍した地域もそれぞれ異なり、同じ土地の商人であっても決して同一の商品を同一の地方を拠点として行商したものではない。それらについては既に多くの先学や郷土史家の研究がある。とくに滋賀大学経済学部(旧彦根高商)の諸先学の業績には瞠目すべきものがある。とくに菅野和太郎氏の『近江商人の研究』(初版・昭和16年、復版・昭和47年、有斐閣刊)、江頭恒治氏の『近江商人』(昭和34年、弘文堂刊)、『近江商人中井家の研究』(昭和40年、雄山閣刊)などはその代表的なものであろう。

上述した八幡・日野商人の武士起源説に対し、わたしは「五個荘商人の多くが農民にその起源を有するのではないか」という仮説に立脚して、その起源、村落の権力構造におけるかれらの地位、かれらの商魂と真宗信仰との関係などについて若干の考察を試みたいと思う。これによって湖東文化や湖東農村社会の一特徴を明らかにし、中部広域圏行政——とくにその社会的文化的方面的施策立案に資し、併せて、当圏域を中心とする定住圏構想や文化活動圏構想を描く場合の一つの参考に資したい、というのが本論考のねらいである。

第1節 五個荘町における農民生活の窮乏

1 五個荘町金堂部落の代表的商人層

五個荘町は昭和30年、旭村、南五個荘村、北五個荘町および安土町大字清水鼻が合併して成立したものであるが、現在町内は25部落から成立っており、それぞれに区長がおかれている。そのなかで商人の多く発生したのは川並、石馬寺、宮荘、金堂、竜田、山本、築瀬の諸部落であるといわれている。わたしが主たる対象地としたのは当町最大の部落である金堂(戸数200余)である。因みに金堂部落出身の商人で現在も大をなしているものに、京都市に本店をもつ「外与」株式会社と、その分家「外市」株式会社がある。

「外与」は現在270余年の歴史をもつが、『外与270年史』)、その創業は元禄13年(1700年)、

代々と左衛門を襲名し、外村一統の総本家である。「外村家は、源平の合戦で有名な那須与市宗高の末孫金堂修理の允の後裔と伝えられるが、金堂の弘誓寺（大谷派浄土真宗、外村家菩提寺）所蔵の万留記および日記など元禄以前のものが散佚して伝わらず、これを証すべき古記録はないが、外村家過去帳によると、第2世照玄の父を以て初代とし、先祖代々金堂村の百姓を相勤め、勤儉の家風を守り、その住居は質素であったが、村方の年貢が調えられない時は、銀子取替えの村用を弁ずるほどの有力農家であって、寛文4年（1664）幕府の検地にかかる御縄水帳に与左衛門所有田地1町余という記録がある」（前掲社史3頁）と伝えており、現在15代を数える。

後者の「外市」株式会社は、初代市郎兵衛が文久2年（1862）に創業以来、昭和52年を以て115年を迎えた（『外市株式会社115年史』）。市郎兵衛は14歳の時本家外村与左衛門家へ奉公に出て、その才幹を認められ、主人が55歳で没した当時、相続人が幼少であったため、才覚のある手代小兵衛を長女の養子に迎え、本家の内政、店方支配を兼ねた後見役となった」（前掲社史・序文）。文久2年、49歳のとき本家の後見役を辞し分家将来のための生業として、自宅を本拠にして近江・越前・越中・能登各産の麻布類を行商販売したという（同2頁）。また同書には「世にいう近江商人の多くが佐々木氏の家臣とか、御用係から転向した者が比較的多かったので士魂商才を以てうたわれた通説があるが、戦国乱世の時代永禄11年織田信長の攻撃をうけて佐々木氏の観音寺城が落ちたとき、臣下の大多数が弓箭を捨ててそのまま城下の村々で農耕に従った……。彼等は常に進取の気性に富み…寛文の頃にはこの地方一帯の農家で織出す特産品となっていた近江麻布を、男子が農閑期を利用して各地へ行商して歩く風習が興って、これがやがて近江商人の発祥をなしたようである」（前掲社史、3～4頁、傍点は筆者）とも述べられている。

以上二つの簡単な社史からみると、五個荘商人の場合、直接に武士から商人に転じたのではなく、一旦帰農し永年にわたって農業に従事し

た者が、その農魂を以て商業に転じたもの、あるいは純粹の農民が商家に丁稚奉公し、のち商人として独立成功したケースが多いのではないかと想察されるのである。

現在18代を数え、先代まで商人を勤めた山村庄助家も、先祖は武家であるが当地では代々伊右衛門を襲名した小地主であり、当地産の編笠・燈心・麻織物などをもって信州飯田へ赴き、帰途は飯田から元結を持帰る旅行商人として出発したのであった。後、京都の小間物や神功丸（京三条白川橋西2丁目大黒屋亦兵衛調合の薬品）、日野の薬品などを飯田に届けて漸次商勢を拡張した。その他の事例については省略するが、多くの五個荘商人がなぜ農民層から身を起したのであるか、そのことを五個荘農民生活の過去の実態から考察してみよう。

2 農民層の分解

金堂村は藩政時代、神崎郡13ヶ村とともに松平甲斐守（大和郡山藩）の所領であり、仲仙道筋武佐宿の助郷をも勤めていた。当時右13ヶ村の村高と助郷高を表示すると表4—8のごとくである。金堂村は郡中でもかなりの大村であり、助郷の負担も種村、佐野村、神郷村、川並村に次いで大きかったことが知られる。

しかし、村内における耕地等の保有状況は必ずしも均等ではなく、零細農や無高層の多く存

表4—8 神崎郡13ヶ村村高

村 名	村 高	助 郷 高	大 工 高
金 堂 村	889.814 ^石	195.000 ^石	^石
北 庄 村	1126.000	96.000	
五位田村	153.380	13.100	
和 田 村	200.680	17.200	
長勝寺村	289.090	55.680	
神 郷 村	689.900	280.000	
種 村	977.842	412.000	
林 村	353.440	53.655	
猪 子 村	312.440	79.927	140.000
佐 野 村	897.540	330.000	66.000
佐 生 村	276.405		46.405
石馬寺村	592.978	87.000	
川 並 村	1003.600	204.000	

注 ①助郷高、大工高は村高の内石である。

②天保4年巳6月「近江国神崎郡十三ヶ村村高書上帳」（金堂文書）に拠る。

表4-9 高別家数の分布
(金堂部落 安政二年=1855)

組名 高別	東南 出組	西南 出組	中村 組	新牧 組	東北 出組	西北 出組	西出 組	計(率)
無 高	6	5	5	0	7	6	9	38(17.4)
1石未満	5	14	8	13	3	2	11	56(25.7)
3石未満	6	6	1	6	6	1	6	32(14.7)
5石未満	2	4	5	3	4	3	6	27(12.4)
5~10石	3	3	13	10	7	3	4	43(19.7)
10~15石	4	1	3	2	3	1		14(6.4)
15~20石	3							3(1.4)
20石~	1		1	2	1			5(2.3)
計	30	33	36	36	31	16	36	218

在したことは表4-9によって知ることができる。

村内7組(計218戸)の合計についてみると無高層が38戸(17.4%)、5石未満の零細農家が115戸(52.8%)にのぼり、両者を合せると実に7割が貧農層であったことが知られる。5~10石層を中農とすればそれが約2割、10石以上の富農層が1割ということになるから、安政2年(1855)当時において貧農層の高率が著しく注目されるのである。ところで村内7組のうち東南出組に富農層が多く集中し、そのなかに外村与左衛門を筆頭とする外村一族が存在することを指摘しておく。

金堂村をはじめ五個荘町一帯は愛知川の氾濫と、観音寺山からの洪水によってしばしば水難に見舞われ、腰まで水につかって稲作に従事した湿田地帯であったといわれる。したがって生産力は他地方に比べて相対的に低く、このことが貧農層析出の基本的要因であったと考えられる。そのほか貧困化の要因となったものを、天保12年(1841)6月の村明細帳からうかがってみよう。

「年恐奉指上口上書」⁹⁾

一、江州神崎郡金堂村之儀者野山草刈場等も無御座故田肥芝薪ニ至ル迄一切買求候 農業之手透ニ男者編笠、女者布機織仕候而御年貢並田肥代金之助力ニ致シ漸渡世仕候儀ニ御座候
一、当村之儀者惣田勝ニ而至而土性強ク牛馬等遣ひ候事難相成唯人力而已ニ而耕作仕候儀ニ御座候
一、御陣屋之儀者和州郡山御城主本多信濃守様

領分之節元禄六酉年御建立有之候て東江州近く御領分五拾三ヶ村御支配有之候 其後御公領ニ相成猶又当御領主様にも御役人出役有之候而御用向人足普請修覆人足等数多御座候得共往古々当村ニ而相勤来り候儀ニ御座候
一、中仙道掃除丁場五拾四間余御座候而常々掃除普請万端百姓役ニ仕来り候儀ニ御座候
右奉申上候通当村之儀者甚渡世間ケ敷難渋之村方ニ有之候処此上助郷相勤罷懸候而者必死ニ困窮弥増可申候哉与村方一同敷ケ敷奉存候乍恐此段御賢察被為成下幾重にも御憐愍之程御願奉申上候
以上

天保十二年丑六月

松平甲斐守領分

近江国神崎郡金堂村

庄屋 休兵衛

年寄 孫右衛門

組頭惣代 徳兵衛

町田庄三郎殿

向嶋真兵衛殿

これによってみると、普通の農山村にある入会山野がなく田肥や燃料も購入を余儀なくされていたこと、耕作に牛馬使用の不可能であったこと、助郷役をはじめ公儀出役の多かったことなどが、農民生活窮乏の原因であったことが推定される。このため必然的に、天明時代や天保時代の飢饉に際しては多くの救恤民を出すことになる。次の文書は、その一端を示すものである。

天明五巳年
奉 願上御救人別帳
正月 下帳

(人別省略)

右之者共下地ノ困窮之者難儀仕候処近年永々米穀高値ニ而其上村方ニ仕馴候家織編笠等も不時節ニ御座候 尚又野山之林等も無御座村方ニ而諸事難儀仕候 親類共并組内村方ノ茂段々心付仕候得共時節柄悪敷困窮之砌ニ御座候而是又相続不申内ニ袖口にも出候者茂御座候而難渋ニ奉存候 去春も御願ひ申上候処御慈悲を以て御救被下置難有仕合ニ奉存候 又候奉願上候茂恐多ク奉存候得共何卒御慈悲を以て右之者共今年

表4—10 貧 農 層 の 増 加

年時	保有高	無 高	1石未満	1～5石	5～10石	10～20石	20石以上	計
天保5 (1834)		21(11.8%)	42(23.6)	51(28.7)	34(19.1)	26(14.6)	4(2.2)	178 (010.0)
嘉永5 (1852)		46(23.0%)	30(15.0)	60(30.0)	42(21.0)	18(9.0)	4(2.0)	200 (100.0)

(資料) 各年次『金堂村五人組帳』(滋賀県立図書館蔵・写真版)に拠る。

之処為御救被下置候ハ、難有可奉存候 以上
天明五巳年正月

神崎郡金堂村

庄屋 喜 十 郎㊤

年寄 源 治 郎㊤

組頭惣代 半 兵 衛㊤

〃 吉 兵 衛㊤

〃 伊左衛門㊤

御代官様

この年=天明5年(1785)の救恤者は70人(男29,女41)であったが、数年後の天明8年(1788)にも同様な救恤願を代官宛に提出,その数112人(男52,女60)に達した。そのなかには今日のいわゆる独居老人をふくめて無高層が16戸,1石以下の貧農層が16戸存在した。さらに天保8年(1837)にも91人が救恤を受けている。このようにして窮乏化→無高層への転落傾向が天保から嘉永にかけて顕在化して来る(表4—10参照)。僅か20年足らずの間に無高層が2倍に増加している。1石以下の貧農層が無高層に転落したのであろう。このような貧困層は地元に住んで農業に従事するよりも他所へ出稼するか,奉公することを余儀なくされる。『村高人別取調書上帳』によって,他所出稼者や他所奉公人の数をみると表4—11のごとくである。その奉公先や出稼先がどこであるかは明示されていないが,それが近隣または当地出身の近江商人層の家であったことは想像するに難くない。商人として独立成功したものが多い当地の場合,また奉公人を郷里から雇入れる当地の慣

表4—11 出 稼 奉 公 人 の 数

	他所へ奉公に 出ているもの	他所へ出稼し ているもの	計
文政5(1822)	57	35	92
天保3(1832)	56	37	93
嘉永3(1850)	87	?	

(資料) 各年次『村高人別取調書上帳』に拠る。

習を考慮するとき,このような推定は誤りではないと思う。

少し時代をさかのぼるが,文化8年(1811)の「村諸願届請書」(金堂村 庄屋嘉十郎)によると,何人かの出稼人とその家族員の氏名年齢を記しているが,そのなかの一例をつぎに引用してみよう。

石高二石五斗九升 百姓□次郎(当年39歳)

妻 (〃 38歳)

倅 (〃 13歳)

娘 (病 死)

倅 (〃)

□次郎儀七ヶ年以前文化二丑年十二月家出仕其節欠離帳切之儀御願奉申上候然ル処武州高麗郡飯能と申所ニ知人御座候ニ付稼奉公仕罷在候処此節井伊掃部頭様御領分当国愛知郡□□村ニ罷有候親類□五郎と申者方へ手寄悔先非村方親類共江帰村之儀御願申上呉候様度々右□五郎を以申聞候間得与相組申候処不届相改御百姓大切ニ可仕段重々相詫候儀相違無御座候間何卒右□次郎帰村之儀 御憐愍を以御放免仕 成下置候様奉願上候 以上
文化八末年二月

江洲神崎郡金堂村

□次郎親類

□左衛門

同 □五 郎

組頭 伊右衛門

右親類組頭御願奉申上候通相違無御座候間何卒願之通被仰付被下置候者私共一統難有奉存候 以上

庄屋 喜 十 郎

年寄 十郎兵衛

御代官様

(注) 実名の一部を□によって秘した。傍点は筆者。

資料は滋賀大学経済学部資料館所蔵。

奉公のため武蔵国の知人を頼って家出をした

が、事、志と異い、郷里へ直接帰ることが出来ないで愛知郡某村の親戚に身を寄せ、親戚の仲介によって帰村を願ひ出たものである。出稼や奉公に出て成功したものもあったがこのような功成らずして帰村する例もあったと思われる。

第2節 商人層の台頭と発展

1 金堂商人の発展

「外与」家と「外市」家については前述したが、その他の一般農民層出身者がいつ頃商人としての地位を築いて行ったのであろうか、については確証が得られない。左の文書はそれを知る一つの手がかりになるであろう。

乍恐以書付御願ひ申上候

一、此度通用御停止之金銀毫朱銀等員数取調書上候様被為 仰渡承知奉畏候然ル処当村之儀者□□□御百姓透問ニ旅商売渡世仕候者共□□此度適用御停止之儀遠近之国々江早速飛脚相立罷有候得共来ル十日迄ニ者所持金員数取調之儀相訳り兼申候間何卒日数当月中御猶予御願ひ申上度者共乍恐左と奉存上候（本文中の傍点は筆者）

一、京都并丹後国商売仕候	市左衛門
一、信洲飯田松本在ニ商売仕候	徳兵衛
一、上州野州武州商売仕候	宗兵衛
一、江戸商売仕候	卯兵衛
一、尾州三州商売仕候	七左衛門
一、右 同断	伊兵衛
一、駿州遠州商売仕候	久右衛門
一、右 同断	利右衛門
一、信州商売仕候	伊右衛門
一、右 同断	増兵衛
一、三丹州商売仕候	万右衛門
一、上州武州商売仕候	武兵衛
一、越前加賀商売仕候	藤兵衛
一、和州播州商売仕候	善右衛門

前書之通名前之者共御願奉申上候何卒御猶予之儀御願奉申上候右願之通御聞濟被成下置候ハ、難有仕合ニ奉存候 以上

天保十三寅年九月

神崎郡金堂村

庄屋 休兵衛

年寄 孫右衛門

御代官様 （滋賀大学史料館所蔵文書）

百姓の透問、つまり農閑期を利用して遠く関東、東海、北陸、播州まで旅商売をした者が少くとも上記14人いたということになる。その中で資本を蓄積し、商業資本金家として当時既に成長したものはつぎの3人であると思われる。

一、此度当村方之内ニ而大坂廻しを以諸国江差出申候諸品荷物等有之候ハ、取調書上可申旨被 仰渡奉畏候 則村方取調申候処年々大坂廻しを以て国々江差出候諸品荷物左之通

一布類 江州神崎郡金堂村

善右衛門

是者大坂表相廻し播州明石仲町吉野半兵衛方へ差送り申候

一編笠 同 村

庄右衛門

是者大坂表相廻し紀州若山瓦町安保田屋清助方へ差送り申候

一編笠 同 村

彦 六

是者大坂□□筋唐物町角天満屋六郎兵衛方江差送り申候

右之通ニ御座候 以上

天保十四卯年五月

江州神崎郡金堂村

庄屋 山村休兵衛

年寄 七左衛門

御役所様 （同上 所蔵文書）

以上は何れも在地のまま旅商売や出荷を行なったものであるが、同じ天保14年(1843)6月の「他国稼奉公稼之者御取調付書上帳」に次の記事のあることも注目される。

（前 略）

一、村方人別之者前々江江戸表并当分稼之者年久敷出稼ニ参居候者奉公に出居候者左ニ奉書上候

として、つぎの記述がある。

外村与左衛門

佐一郎兵衛

□□□悴 五兵衛

是者江戸表堀留二丁目

布屋宗兵衛方止宿して出稼呉服類持下り商売仕居候

外村宗兵衛

是者江戸表堀留二丁目布屋宗兵衛出店ニ而呉服類商売稼仕居候 尤町内御奉公所江御届之儀ハ江州住宅ニ者留守居人布屋治郎兵衛と申すものの名前にて御届申上置候
右之通村方取調奉差上候処相違無御座候 以上
天保十四卯年六月

神崎郡金堂村

庄屋 山村休兵衛

年寄 七左衛門

御代官様 (滋賀大学史料館所蔵文書)

後に金堂の近江商人として大をなすにいたった外村宗兵衛が江戸表で呉服商をしており、そこへ外村与左衛門(襲名)その他が止宿して呉服類の行商に従事していたことが知られるのである。

然らば、上記2、3の文書によって知られる当時の商人層は、どのような社会階層に属していたのであろうか。当時の5人組帳に記載されている持高によって検討してみよう。

天保5年(1834)の5人組帳記載石高10石以上を列挙し、安政・文久にいたる30年間の推移をみたのが表4—12である(文久4年の欄に記載のないのは10石以下である)。天保5年と元禄5年とは150年近い年代差があること、その間に町組の編制替があるため、その継続性をたどることは難しい。この表によってみると、10石以上層の約半数が農業のほかには商業を兼営している。地主的勢力によって漸次資本を蓄積し、それを基にして商業に進出したものもあろうし、貧農から商業に転じ、その利益によって土地を集積したものもあろうが、天保から文久にいたる30年間の推移を見る限り、前者のケースが多いと推定される。ただ、表4—12下方に示す五家の如きは、中農以下の出身であり、前掲資料(天保13年)の示すように、伊兵衛は尾州・三州に、藤兵衛は越前・加賀へ、利右衛門は三河・遠江へ、増兵衛は信州へ、万右衛門は丹州へ、それぞれ農閑期に旅行商を行なっている。こうした形の天秤棒行商がとくに五個荘商人の特色であり、10石以上層の商人層もこの過程を経て漸次成長発展したものと思われる。そして行商を始めても農業を決して捨てなかったのである。外与家にしてもその初期は同じであ

った。

ただ、当時商家として成功した者の多くは現在是在村せず、その邸宅や屋敷のみが残されているケースが多い。また当時在村しても現在は公務員勤務の子孫が多く、居村との関係は漸次うすれつつある現状である。

2 金堂村周辺の状況

水吞百姓の比率が高く、貧農層から商家への奉公→行商の過程をたどったと推定されるのは、同じ五個荘町石馬寺部落の場合である。享保14年(1725)の「江州神崎郡石馬寺村諸色明細帳」(県立図書館蔵写真版)によると、家数76軒のうち本百姓56、水吞百姓20(26.3%)に達しており、同村で布類、油、もとゆい売商8人(茂兵衛、伝右衛門、源十郎、忠右衛門、藤兵衛、武右衛門、利左衛門、源右衛門)の名前が挙げられている。このうち、武右衛門は同村の中村治兵衛らと同族で、享保2年(1713)自らが織った麻布をはじめて信州地方に行商し、この家の基礎を築いた。嘉永6年(1853)に没している。同家2代の父か祖父であると推定される。その本家が、のちに布商で名を成した中村治兵衛家である。

同家の先祖は「石馬寺塔頭不動坊の住持であったが、戦国時代同寺の荒廃したるより、その門前村(石馬寺部落)で俗に還り中村刑部と名乗った」⁷⁾とされ、その子角左衛門は徳永左馬助に仕えたが、後に帰農した。その後裔が伝右衛門といわれるから、それが上記明細帳に記載の伝右衛門と推定され、その孫が初代治兵衛である。すなわち伝右衛門と武右衛門はいずれも帰農して農業の傍ら麻布を織りそれを各地に行商していた中村同族なのである。他の6人についてはその系譜を確かめ得ないが、その多くは農家出身であると推定される。これらの人びとが行商によって成功し、漸次商業資本家として発展したであろうことが次の文書によって知られる。すなわち、天保14年(1843)の「大坂廻シ諸荷物取調書上帳」(石馬寺文書、県立図書館蔵写真版)によると、次のごとく記されている。

中村治兵衛 布類呉服

是者大坂道頓堀北側町泉屋五郎右衛門方江

取次を以紀州若山米屋町大和屋武兵衛方江
差送申候
塚本助右衛門 布類
是者大坂淀屋橋金鍵屋藤兵衛取次を以備前
国岡山中嶋町伏見屋藤三郎方江差送申候
藤右衛門 布類
和 助 太物類

是者大坂土佐堀2丁目油屋喜兵衛取次を以
豊前小倉室町中原屋嘉兵衛方江差送り申候
塚本助右衛門 京呉服 東呉服
是者大坂表より差送同所大川町銭屋佐兵衛
方取次を以備前岡山中嶋町伏見屋藤三郎方
江差送申候
布 類

表 4—12 上層農家の持高の推移と商人層

地主名	年 次	元禄 5 年 (1692)	天保 5 年 (1834)	安政 2 年 (1855)	文久 4 年 (1864)	摘 要
外 村 与三衛門	石	32.381	31.753	26.258	28.482	◎ × (京 都 市)
伊右衛門	石	10.051	25.722	20.488	19.558	◎ 在村 (山 脇 姓)
平 八			24.950	25.208	27.619	◎ 在村 (山 村 姓)
助右衛門			20.329	11.874	11.794	○ 在村 (中 沢 姓)
長 次 郎			17.316	17.688	17.688	○ 在村 (外 村 姓)
増右衛門			15.998	3.792		○ 在村 (山 村 姓)
(外村) 宗 兵 衛			15.637	17.256	20.938	◎ ×
徳 兵 衛			15.002	4.906		絶
七郎左衛門			14.264	26.832	26.832	絶
武 兵 衛			14.069	13.964	14.249	◎? 在村 (中 沢 姓)
善右衛門			14.058	13.970		◎ × (函 館 市)
(外村) 宇 兵 衛			13.052	18.609	14.341	◎ × (名古屋市)
久右衛門			12.942	13.468	13.449	◎ 絶 (塚 本 姓)
次郎左衛門			12.942	7.836		?
市左衛門	9.470		12.324	20.172	11.169	◎ 在村 (辻 姓)
長右衛門			12.310	6.017		◎ × (中 沢 姓)
五郎右衛門	14.730		12.308	12.087	12.087	○ 在村 (辻 姓)
利左衛門			12.183	10.167	10.035	絶
甚左衛門	18.010		11.726	8.538		◎ × (大 阪)
与右衛門			11.425	10.393	11.880	絶
伝 次 郎			11.339	9.451	9.877	○ × (大 阪 市)
武右衛門			11.338	8.684		○ 在村 (塚 本 姓)
太郎左衛門	10.574		11.302	9.462		?
吉 兵 衛			11.168	11.539	11.709	○ 在村 (塚 本 姓)
太 兵 衛			11.033	10.828	10.828	◎ 在村 (山 村 姓)
吉右衛門			10.417	9.817	9.796	○ 絶
市右衛門			10.361	10.258	11.258	?
曾右衛門			10.222	5.712		◎
伝 藏			10.221	5.746		◎ × (大阪)(塚本姓)
安右衛門	10.917		10.082	4.741		絶
伊 兵 衛			1.721	1.721		◎
藤 兵 衛			0.086	6.341		◎
利右衛門			4.899	0.622		◎
増 兵 衛			5.916	6.117		◎
万右衛門	13.565		7.651	6.716		◎

(備考) ① 天保5年を石高順(10石以上)に記した。② 天保5(1834)と元禄5年(1692)は150年の間隔があり、つなぎ得ない。③ 絶は絶家、×は他出、◎商業兼営、○農家

是者大坂天神橋大和屋与兵衛方取次を以大
和八木町小泉屋清兵衛方江差送り申候
久右衛門 荒物類

是者大坂表より差送り信州飯田本町式丁目
舛屋治郎三郎へ差送り申候

このうち塚本助右衛門は石馬寺村の農家の出身。農家は元来収益が薄い所から商業に転じようと決意、隣村塚本村の川島平左衛門に相談の結果、大坂高麗橋通りの綿商島屋助作に奉公、10数年の後その店の支配人となった由であるが、天明4年(1784)没したときの遺書に曰く、「予壮年の比貧苦に逼り、渡世の為に他国へ赴く時、以為く、在郷へ錦を着て還ると古人も云えり。予も亦思へり。若し又、之をも叶はずば寧ろ薦を被るべし。然れども因縁あるにやあらざるにや、年既に70も過ぎ80にも及べども錦を着るに至らず、薦を被るに至らず。時に松前へ通う商人来りて、予に之を求めよと示す。何かと見れば蝦夷錦なり。即ち求めて之を蔵め置き、予が本来空に帰らん時、之を着て逝かんと欲す」⁹⁾と。彼もまた貧農の出身であったことが知られる。上述の書上帳に出て来る、藤右衛門、和助、久右衛門については明細に知り得ない。

金堂村の隣村宮莊村(現在、五個莊町大字宮莊)には条里制の跡が見られるが、その居住地区は新道、宮の西、内屋敷、清水ヶ井の4地区であり、その他の87地区(1地区の広さは凡そ1町歩)は、戦後の乾田化・機械化の完成するまではことごとく湿地地帯であったといわれる(当地北村良三氏談、以下の記述は同氏からの聴取によるものである)。この地も大和郡山藩領でその知行高は1,968石余、反当3俵の年貢を賦課され、明治以後も農民の殆んどは水呑百姓であったという。その地主は、当地出身の近江商人たる高田一統、藤井一統(前者は現在東京、後者は京都に在住)および竹中・異一統(両系統は現在衰微)であった。農民は高い年貢の上に、中仙道参勤交代の折人足として徴発されることが多く、それが農民の貧困度を深刻にした。明治初年、近江商人は作食制度(一種の前貸制)を造って農民の困窮に対処したが、明治・大正期を通じて、小作人が連合して年貢

の割引を地主と交渉するのが常であったという。このような状況から男子は小学校を出ると商人の家に丁稚奉公を勤め、そのうちの何人かが別家として独立させてもらったのである。すなわち、生産力の低く労働のきびしい湿地耕作で農魂を体得したもののみが、それを商魂として、近江商人としての成功を克ち得たのである。筆者が金堂部落の住民に試みたアンケートの結果によると、回答のあった30戸のうち、

(1)近江商人家に奉公して

(i)商家として自立したもの	6戸	16戸 (53%)
(ii)挫折して帰農したもの	8戸	
(i)他の職業に就いたもの	2戸	
(2)奉公した者のいない家	7戸	
(3)不明	7戸	

となっており、村の家の過半数が商人家に奉公した経験をもっていると考えられる。しかし途中で挫折して帰農または他業に就いたものもある。商家として自立し得たものは奉公人中の38%に過ぎない。

〔注〕金堂部落で明治以後転入した新戸を除き、115戸の旧戸に郵送方式でアンケートを求めたが、回答数35(回収率30%)。うち、有効30についての結果を示したものである。

五個莊と同じく多数の近江商人が輩出している近江八幡市——とくにその農村部に当る江頭部落について考察してみよう。

この地域は、近江国でも地主制が典型的に残っているところで、昭和10年(1935)当時、つぎのような大地主が存在した⁹⁾。

34町6反2畝	公吏	井狩弥左衛門
56町9反8畝		井狩貞之
38町5反8畝	農業	井狩一郎
27町2反3畝		井狩松三郎 ¹⁰⁾

井狩一族の系譜やその土地集積事情については後日の調査を期しているが、予想されることは地主層に対して貧民小作層の多かったことである。宝暦10年(1760)の「近江国野洲郡江頭村明細帳」¹¹⁾によると、当村の村高は1,330石3斗8合6勺(反別75町4反8畝23歩)、家数228、人数888の大村である。そのうち高持百姓153戸、水呑百姓75戸(31.6%)が存在したことが注目される。その外に次のような記述がある。

一問屋之事 是者御蔵米并売買荷物請払仕候問屋六軒御座候

一商人之事 是者干鰯、肥物類売申候拾三軒、米仲酒屋、小間物荒物類売申候者拾六軒御座候 其外~~壱~~荷売之商人七拾六人御座候但百姓~~ニ~~而暮居候（傍点筆者）

一諸職人之事 油屋二軒、紺屋三軒、傘屋拾二軒、樋屋一人、白作二人、畳指一人、指物屋二軒御座候

一酒株之事 是者八軒御座候内四軒ハ相止メ居申候

一男女作間渡世之事 男は縄ない或は小揚げ日用持仕候 女ハ用布、木綿或は麻質紡仕候

一田畑小作人上ゲ

上田	壱反歩ニ付	壱石壱斗
中田	〃	壱石
下田	〃	九斗
上畑	〃	九斗
中畑	〃	八斗
下畑	〃	七斗

以上の記述から推定すると江頭村は、農村とはいえかなりの戸数・人口を有する田舎町の性格を持っており、八幡市に近いことや琵琶湖水運の便もあって問屋、各種職人、商店などをもっていた。他方、貧困に滞ぐ下層農民層が壱荷売りの行商によって生活していたことが知られるのである。これらの行商人のうち近江商人として成長したものも若干あったものと考えられるのである。

次いで明和7年(1770)明細帳によると、無高百姓の数は全戸数235（寺7を除く）のうち77軒、借屋百姓3軒があり、これらを合せると34%に達する。天保6年(1835)には無高百姓が61戸(28%)、慶応4年(1868)には63戸(28%)存在した。さらに慶応2年(1866)の明細帳には男445人のうち「他所奉公稼罷出候者 四拾五人」と記されているところからみると、ここ江頭村でも、五個荘の金堂・石鳥寺・宮荘と同様に、多くの出稼奉公のあったことが知られる。それが近江商人家への奉公稼であつたかどうかは速断出来ないが、「地主一小作関係」の濃厚な存在

表4-13 林村(竜王町)の階層分布

～1石	1～5	5～10	10～20	20～	計
4 (4.7)	23 (27.1)	22 (25.9)	23 (27.1)	13 (15.3)	85 (100.0)

（資料）県立図書館蔵写真版、弘化3年林村五人組帳

→貧農層の析出→奉公や出稼ぎの増加という過程の存在が推定されるのである。

然らば近江商人の集中的発祥地（近江八幡・日野・五個荘）の、いわゆる周辺地帯では農民の階層分布はどのような状況であつたろうか、2,3の事例を引用して比較考察の資料としたい。先ず蒲生郡林村（現在竜王町）の弘化3年(1846)「5人組帳」によると、村惣高1,124石余のうち、10石以上保有の富農層は85戸中36戸(42%、うち組頭嘉兵衛は40石保有)に達し、それと対照的に5石以下の貧農層も32%存在するが、無高層は皆無である(表4-1参照)。

同じ竜王町の山之上部落における文政5年(1822)「百姓家数牛数書上帳」によると、家数125のうち無高百姓は4戸に過ぎず、それに先だつ文化7年(1810)においても無高層は家数117戸のうち3戸に過ぎない。文政5年の書上帳に牛数が48と記されているのも、五個荘や江頭村に牛数「なし」と記されているのと対照的である。ここでは、林村と同様、農業経営の自然的・社会的諸条件に比較的恵まれ、農民の定着性が強かったものと推測されるのである。文政5年山之上村の「奉公人書上帳」によると、一、人数五人 男 是ハ当村~~ノ~~江戸町人へ奉公に出居候

一、人数貳人 男 是ハ当村~~ノ~~京都町人へ奉公に出居候

一、人数五人 女 是ハ他村~~ノ~~当村へ奉公（傍点筆者）

と記され、江戸京都への奉公人が少数存在するとしても、前述の五個荘や江頭の比ではない。

（但し、同じ竜王町の綾戸部落には、享保9年(1724)、家数86のうち水呑が30戸(35%)が存在した）。

以上の記述から推論できることはつぎのようである。比較的丘陵寄りの自然災害の少いところや自然条件に恵まれた村落では、貧農無高層

の比率が少く、五個荘や江頭のごとき湿田地帯や災害多発地帯では逆に貧農無高層が多く、これらの地域では京都・江戸等町人への奉公人が多く、それらがやがて近江商人として独立成功する事例が多かったのではないかと、あるいは奉公の過程を経ないで直接天びん棒をかついで諸国行商に出かけ、商人として漸次成長して行ったのではないかと、ということである。そして地許に商人として成功したものがあれば先ずそこに奉公し、商才と能力があれば別家を許されて独立する場合も多かったであろう。冒頭で述べたように、近江商人の起源説はいろいろあり、これを一元的に論ずることはできないが、五個荘出身商人の場合は農民生活の困窮がその主要因とみられ、その点において八幡商人や日野商人の武士起源説に対し、五個荘商人の農民起源説を強調できるのではないかと、というのが筆者の見解である。

[注]

- 1) 自治省行政局編『広域市町村圏要覧』1978, 110頁
- 2) 『滋賀県史』4巻, 365頁以下参照。
- 3) 福尾氏は、算数に明かるい帰化人、文化の高い京都・奈良に近接していること、農業の不安定であること、の三つが近江商人を成長させた、としている(『滋賀県近江八幡町誌』参照)。
- 4) 滋賀大学経済学部史料館蔵『金堂村文書』に拠る。
- 5) 滋賀県立図書館蔵、金堂文書写真版に拠る。
- 6) 『神崎郡誌』465頁。
- 7) 前掲書463頁。
- 8) 同465頁。
- 9) 農地改革当時、東北地方には1千町歩以上の大地主が多数に存在した。関西における島根県でも50町歩地主が50戸近くあり、田部家のごときは450町歩、株小作人(東北地方の名子に類似する)850人余を抱えていた。これに比べると滋賀県ははじめ近畿地方には大地主が、成長しなかったと推定される。
- 10) 『滋賀県農地改革誌』713頁および『島根県農地改革誌』。
- 11) 以下江頭村その他についての記述は、滋賀県立図書館蔵の古文書写真版に拠る。

第3節 近江商人の商魂と真宗信仰

近江商人の商魂が、きびしい自然条件や苛酷な経済的・政治的誅求と闘ってきた江州農民の

農魂に基づくものであること、についてわたしはさきに述べた。しかし、そのような農魂や商魂が、当地方にもっとも濃厚に分布する浄土真宗の教義や実践となんらかの関係をもつものではないか、というのが本節の課題である。事実、成功した近江商人家の殆んどは真宗門徒なのである。

滋賀県の宗派分布はきわめて複雑である。甲賀地方では浄土宗が圧倒的に多く、湖西から湖北にかけては天台宗、曹洞宗、真宗が入組んでいる。他方、湖北から湖東に南下する真宗の濃厚地帯が広く存在し、近江商人の多く出たこの湖東地方は真宗の分布度が圧倒的に高い¹⁾。これらの分布状況は、いずれも過去における各宗派の教線拡張や政治的事情などの軌跡を示すものと思われるが、いまはそれを論外におき、近江商人と真宗信仰との関係をなるべく実証的に追求してみたい。

周知のごとくM. ウェーバー(1864~1920)は、その論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(Die protestantische Ethik und der «Geist» des Kapitalismus.) 1904~5年)において、資本主義における資本蓄積の精神と、プロテスタントの職業倫理—「勤労」と「禁欲」—との間に関連のあることを指摘している²⁾。

この立場に立脚して、例えば九州大学の内藤莞爾教授もその論文「宗教と経済倫理—浄土真宗と近江商人」³⁾において、近江商人と浄土真宗との関係について論じていられる。氏は主として真宗教義の分析や近江商人の家訓などにより、文献学的方法を中心として論じていられるが、同教授の若き時代の論文として、その先駆的業績は高く評価すべきものである。また近江商人の研究に多年取組んで来られた彦根高商(現、滋賀大学経済学部)の元教授菅野和太郎氏、江頭恒治氏の著書や論文⁴⁾、田中秀作氏や⁵⁾立命館大学経済学部教授足立政男氏の所説⁶⁾などを参考としながら、わたしなりの見解を述べてみたい。

まず、田中秀作氏は「近世近江商人大活動の底力ともなり、推進力ともなったものは彼等の精神生活における一種の信念ではあるまいか。

勿論、此の信念なるものは彼等が長時間に亘って幾多の経験を積むに従って、知らず識らずの間に自然に生ずる商業的自信によっても、相当に強められたと思われるが、それよりも他力的な神仏に帰依することによって得られた宗教的信念が中核をなすものであろう⁷⁾と仮定し、(一)信仰生活に入れる近江商人の例、(二)家訓家憲書信に表れたる信仰、(三)近江商人の神仏奉仕、(四)近江商人の信仰対象、の4項目を掲げて説明されている。とくに最後の1項目において近江の国における宗教的環境をあげ、その神社信仰(例えば、八幡商人の日牟礼神社、日野商人の綿向神社、柳川商人の大宮神社、五箇荘商人の五箇神社・竜田神社)と、仏教信仰(天台宗の山門寺門の2大本山とその末寺の多いこと、真宗における連如・実如上人の活躍とその信仰の拡大普及等を挙げ、佐々木氏を始め多くの名門豪族から一般庶民にいたるまでの信仏傾向)のもつ風土的背景を強調していられる⁸⁾しかし、とくに真宗信仰に限定して近江商人との関係を論じていられるのではない。

また、足立政男氏の著書は主として京都室町商人の老舗を挙げて、その家訓・店則ならびに商法に触れられ、老舗の家業経営における組織(相続や別家、奉公人、株仲間の諸制度)について詳述されており、そのなかで、京都における近江商人の代表ともいべき外^{とのよ}与家(外村与左衛門家)の定目や心得書、その他についてかなりの頁を費して紹介していられる。外与家の「定目」の一つに「神・儒・仏尊敬いたし、内心に仏法を深く相貯江、朝夕内仏江参詣は不及申、先祖中興、近代重なる御忌日には主人は勿論、別家人は不残、店惣代^{どのよ}に頭上式人仏参可致候、朝早くより掛り々々差支無之様相心得入替々々参詣し、尤店中堅精進致し、万事相慎可申事」とあり、神・儒・仏尊敬、とくに仏教信仰と祖先崇拜を強調^{とのいち}されている。

外与の分家外市商店の初代有常(市郎兵衛)が、その記録として書き残した「家の記」にも「仏教を大切に聴聞致し、在間の義理を弁え、又仏を念うは極楽へ参るなり、先祖代々自然の道理に相叶い、心に仏心を深く尊信奉り候こと肝要なり⁹⁾」と記し、分家独立後は自家へ立派

な仏壇を調え、その本尊として安政2年3月、出生地中下村(愛知郡)慈光寺から聖徳太子作と伝えられる阿弥陀如来像を迎えている。

日野町中井家の家訓については江頭恒治氏の大著『近江商人中井家の研究』があり、その初代が遺した「金持商人一枚起請文」を紹介すると、つぎの如くである¹⁰⁾。

「もろもろの人々沙汰し申さるゝハ、金溜る人を運のある、我は運のなき杯と申ハ、愚にして大なる誤なり。運と申事ハ候はず。金持にならんと思はば、酒宴遊興者を禁じ、長寿を心掛、始末第一に商売を励むより外に仔細は候はず。此外に貪欲を思はば先祖の隣みにはづれ、天理にもれ候べし。始末と吝ききの違あり。無智の輩ハ同事とも思ふべきか。吝光りは消えうせぬ、始末の光明満ぬれば、十万億土を照すべし。かく心得て行ひなせる身には、五万十金の出来るは疑ひなし、但運と申事の候て、国の長者とも呼るゝ事ハ、一代にては成かたし。二代三代もつづいて善人の生れ出る也。それを祈候には、陰事善事をなさんより全別儀候はず。後の子孫の奢を防んため、愚老の所存を書記畢。

文化二丑正月

九十翁 中井良祐識

要するに、近江商人といわれる家の多くは真宗を信仰し(前記の中井家は浄土宗である)、今日でも盛大に報恩講を営む慣習がある。近江商人を集散的に多く出した日野町の中井家、岡崎家、藤塚家などを筆者は昨夏訪問したが、同町猫田遠融寺(真宗本願寺派)の永代檀家惣代を勤めている藤崎家では、先祖の命日に当る毎月の11、13、17、18、20、21、23の7回にわたり、僧を招いて先祖供養を行なっている。また、一建立の八幡神社が邸内に祀られ、毎年9月1日と15日には、神酒と自家製の押し饅頭を神前に供して祀るという。また、村中観音堂があり、村びとの多くは毎朝参堂し、毎月18日午後2時から観音講による施餓鬼が行われる由である。

たしかに近江国は、諸家の指摘されるように神社や仏教信仰の濃厚な風土である¹¹⁾。わたしが先にあげた金堂部落のアンケート調査においても、報恩講を現在でも行なっている家は凡そ

半数に達し、旧家になればその外に先祖祭りを行なっている家が多い。かつては近江商人であり現在は衰退しているが、五個荘町宮荘のT家の祖先法要は、1週間位継続して今も盛大に行われているという。

さて、このような信仰的風土をもつ近江の商人の商魂は、農魂にその源泉をもつことをわたしは先に述べたが、それはとくに農民的出自を多くもつ五個荘出身の近江商人の場合に、より多く該当すると思われる。こうした考え方は、第1節で述べた商人層の農民的出自によって得られたものであるが、五個荘金堂部落の山脇庄助氏、宮荘部落の北村良三氏その他の人びとの示唆に負うところが大きい。北村氏は同部落の戦前の農民生活について実感を以て語られたのであるが、「あの膝までつかる湿田の中で星から星まで働らかなければならなかった苦しみは、高い小作料を支払う家ではなお一層のことであつたが、並大抵なことではなかった。それは、南無阿弥陀仏の六字の名号につながつてのみ耐え得るものであつた」と。また「自分の父も一町八反作っていたが、全く念仏三昧の妙好人で、区長も長く勤め、部落の世話をさせてもらうと常に語っていた」と筆者に話されたのである。また「ある行商人は天びん棒をかついで関東の碓氷峠を登るとき、六字の名号を称えながら苦難に耐えた」と伝えられている。農民生活のきびしさは、他力の真宗信仰によってのみ救われ得たのであり、その長い間の農民的苦難に耐えて行くところに近江独特の農民魂が養われ、それが天びん棒行商から出発した近江商人を育くんだ商魂に通ずるのである。それは難かしい仏教の教義から直接に与えられるのではなく、法然上人の一枚起請文「智者の振舞をせずしてただ一向に念仏すべし」という法燈を継がれた親鸞上人の念仏の教え一行住坐臥に六字の名号を唱えることによって体得された、簡明直截な信仰なのである。この信仰が祖先崇拜と結びついて報恩講の結社を促がし、現世と来世をつなぐ契機ともなるのであつた。したがってどの家でも金がたまると先ず仏壇を美しくすることを心がけ、「家を取るか仏壇をとるか」といわれる位仏壇の美しいものを持っている。とく

に外与家の仏壇は荘麗を極めている由である。金堂の山脇家当主庄助氏は「五個荘商人の本質は敬神崇祖にあり、金が儲かれば仏壇に金を使い、一流の仏壇は金の延棒を使っていたから、若し商売に失敗すれば仏壇を売れ、という家訓がある。それで再起の資金が出るのである。さらに近江商人の特徴はその儲けを社会に還元するという思想にある」と語っていられる。

一般に、五個荘商人家では「儲けた金の三分の一を貯金、三分の一を寺社へ奉納、残りの三分の一は自分の小遣にするか人に施せ」という教えがあると、山脇家当主も語っていられるのである。このように、その利潤の一部を社会に還元するというのが、近江商人の経営方針である。そのためか近江の商人は多かれ少なかれ、有形無形の形で、出身郷里のために財力の還元を行なっている。例えば、昭和48年、宮荘の氏神五箇神社の大鳥居再建の際は、大阪・京都その他で活躍している宮荘出身の藤井家や高田・竹中両家から多額の志納金が献上されている(宮荘振興会の機関誌「むつみ」に拠る)。このような事例は、金堂の外与家や外市家、山脇家、その他においてもみられるところであり、また近江八幡や日野の商人においても同様である。

「利潤の一部を社会に還元する」という思想は、いうまでもなく、利潤を得させて頂くのは社会の人びとのお蔭であるという認識に基づくものであり、したがってその一部は社会に還元すべきものである、という利他謝恩の思想であると考えられる。こうした商人の精神の根ざすところが仏教精神、とくに浄土真宗の信仰にあることを認め得ないであらうか。他力信仰の濃厚な風土性をもつ近江の地において、そしてきびしかつた長い農民生活のなかにおいて、とくにそれが農魂として結晶し、やがてそれが近江商人の商魂を育成したものであると、筆者は考える。

冒頭で述べたように、M. ウェーバーは「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」のなかで、「資本主義の精神」という一項を設けて詳細な論述を試みている。その際ウェーバーは、資本主義の精神を抽象的に述べるのではなく、「特殊個体的な特色をもつ具体的発生的な関係

においてのみ把握せざるを得ない」ところの歴史的観念形成の本質に根ざしていることだと捉えている¹²⁾。そこで彼は、フェルジナント・キュルンベルガーの『アメリカ文明の実相』を通じてベンジャミン・フランクリンから「資本主義の精神」考察についての重要な暗示を得ているようである。キュルンベルガーは、当時のアメリカ人の処世訓を総括して「牛からは脂肪をつくり、人からは金銭をつくる」と罵っているが、「この『吝嗇の哲学』に接したとき、そのいちじるしい特徴としてうけとられるのは、信用のできる誠実な人という理想であり、なかならず、自分の資本を増大させることを自己目的と考えることが各人の義務であるという思想である。まことに、ここで教訓されている内容は、たんなる世渡りの技術などではなく、独特の倫理であり……ここでは一つのエートス〔職業倫理〕が表明されているのであり、このエートスの性格こそが、われわれの興味をそそるのである」¹³⁾と述べている。さらに、ゾムバルトの『近代資本主義』(第1巻)における二つの「主導原理」(欲求充足と営利追求)を契機として、「合法的な利潤を使命(=職業)として、組織的に、かつ合理的に追求するという精神的態度を、われわれがここで一応(近代)資本主義の精神」¹⁴⁾とし、その担い手を近世初頭における、向上を目ざして努力を重ねていた産業的中産階級のうちに求めている。そして、「外面的には利潤の獲得をめざすだけの行動が、個人には義務として意識され「天職」という範疇にまで形成されるにいたったのは、いかなる観念の領域にその基盤をもつのだろうか。ただし、この観念こそ「新しい型」の企業家の生活態度に道徳的な基礎と根柢とをあたえたものである」¹⁵⁾とし、その観念の基盤をプロテスタント諸民族における職業(Beruf calling)―ある宗教的な一神から授けられた召命=使命―という観念の中に見出したのである。プロテスタントにおける職業に対する観念と、禁欲的な生活への道徳的要求とが、資本主義や資本主義的生活様式の発展の上に直接的な影響を与えたのであったが、そのうちで禁欲が全力をあげて戦ったのは、現世的快樂を自由奔放に享受することへの戦いで

あった。然らざれば投下資本としての資本の生産性を増大させることが不可能であったからである。それが資本の論理でもある。

近江商人の農魂の中に、六字の号名による耐乏生活への救いがあり、その内面的人間形成が長くきびしい農民生活の間に徐々に完成され、それがやがて近江商人の商魂として結実して行ったであろうことを、筆者は信じて疑わない。かれらが、その利潤の一部を自己のために蓄積すると同時に、その一部を社会に還元して行くことを信条としたその精神構造と生活態度が、西欧に源流を持つ近代資本主義の精神との間に、どのような共通性と特殊性をもつかについては、さらに別の角度から検討する必要があると思われる。(山岡栄市)

〔注〕

1) 大正13年現在の滋賀県における真宗寺院の分布度を見ると、左のごとくである(『滋賀県史』4, 365頁)。

東浅井郡	85.0%	坂田郡	75.8%
犬上郡	66.1%	野洲郡	65.5%
愛知郡	63.2%	伊香郡	62.4%
神崎郡	52.0%	蒲生郡	41.3%
甲賀郡は最少で 9.3% (浄土宗は 55.8%)			

2) 『世界の大思想23, ウェーバー政治・社会論集』(河出書房新社刊, 昭和40年)所収の阿部行蔵訳123頁～217頁参照。

3) この論文は内藤教授の昭和16年(年報「社会学」第8輯)の執筆であるが、近著『日本の宗教と社会』(お茶の水書房刊, 1978)に収載されている。

4) 菅野和太郎著『近江商人の研究』初版昭和16年, 復版昭和47年, 有斐閣刊。

江頭恒治『近江商人中井家の研究』昭和40年, 雄山閣刊, のほか次のような諸論考がある。

「中世の商業と近江」『彦根高商論叢』第19号, 1936。「近江商人の起源と活動」『滋大日本経済文化研究所紀要』第46集, 1956。「近江の豪商中井家の家憲」『彦根論叢』第34号, 1956。「近江の豪商中井家の店則」『彦根論叢』第35号, 1957。「大阪と近江商人」本庄編『近世の大阪』所収, 1959。

5) 田中秀作稿「徳川時代近江商人の信仰に就いて」(彦根高商調査課編『調査研究』第65号所収)。

6) 足立政男『老舗の家訓と家業経営』(広池学園事業部刊, 1974)。

- 7) 田中前掲論文、はしがき。
- 8) 足立前掲書、108頁。
- 9) 『外市KK百十五年史』1977、16頁。
- 10) 江頭恒治著『近江商人中井家の研究』(雄山閣、昭和40年、906頁。
- 11) 肥後和男著『近江における 宮座の研究』(東京文理科大学、昭和13年)。原田敏丸・渡辺守順著『滋賀県の歴史』(山川出版社、昭和47年、211頁以下。社会伝承研究会『近江村落社会の研究』第1号、1976。同第2号、1977年。拙稿「ムラ社会成立のエトスー近江野洲町南桜の 宮座を 中心として」(三船祥二郎教授古稀記念論文集『現代社会と人間の諸問題』昭和53年所収。拙稿「ムラの成立要因とその変化—近江の一農村を事例として—」(『佛教大学研究紀要』第63号、昭和54年所収)。
- 12) 前掲『ウェーバー政治・社会論集』133頁。
- 13) 同 136頁。
- 14) 同 149～50頁。
- 15) 同 156頁。

(昭和54.11月2日稿)